

てもカーシャ、飯盒に半分に満たない食事ではとても空腹を慰めるまでにはいかなかったが我慢をするしかない。各作業班に分けられた。私は道路工事作業班に入ることになった。半地下の天幕兵舎での一晩日、二段ベットの二段で寝る板張りベットでは長旅の疲れは取れない。

伐採には、大きな両引きの鋸で二人一組で呼吸を合わせて、引いたり押ししたりしながら切断するのであるが、一メートル五十センチもある鋸本体が二十キログラムある。切る松などの直径は一メートルもある。横に鋸を左右に引くのは技術を要するのに、ソ連の監督はすぐに手本を見せて仕事にかかれという。現在は、チェーンソーという機械があるが当時のソ連では江戸時代のような作業風景であった。

このようにして、新しい作業にかかわされたわけで、その後からは本格的な強制労働が始まることになった。

さらには、いわゆる民主グループと称する委員、民主ではない共産グループにより洗脳教育もあり、心身

共の戦後強制労働、抑留が始まるのであるが、時を改めて体験を書き綴りたいと思います。

戦車隊を体験して

福岡県 石橋 孝幸

昭和十五（一九四〇）年三月五日、現役兵として入隊するまでは家業の薬工品の集荷卸販売業をしておりました。従業員は二十人おりました。

家族は父母と兄嫁と私、弟、妹に兄の子供二人の八人家族で、兄は応召中で、坑州湾上陸部隊の通信隊におりました。

昭和十四年夏の徴兵検査で甲種合格（戦車）になりました。私は小柄なので戦車兵に選ばれたのだと思いましたが。ちょうど満州のノモンハンでは日ソ両軍が血戦の最中でした。

甲種合格者は欣喜雀躍、打ち揃って祝杯をあげ、胸を張って家に帰りました。男手がなくなるので留守が

心配のはずが、その時は意気軒昂で滅死奉公の一念に燃え、大義に殉ずる喜びに浸っていました。出征中の兄からは便りがあり、入隊前の心得として軍人勅諭を覚えておけと言われましたので、一生懸命勅諭を覚えました。

そのうちに入営令達書が来て、昭和十五年三月五日、満州の戦車第五連隊入隊のため広島に集合することになり、四日早朝、赤紙召集者と二人が村の氏神様の前で神事と出征の決意を述べ、全員に見送られ駅まで一里余の道を「祝入営祝出征」ののぼり旗を先頭に軍歌の合唱で送られました。駅で各部落ごとに「よそに負けるな」と大合唱、大歓呼の波に、一層滅死奉公の決意を固めました。

五日から七日の間は広島城の練兵場で入隊手続きや部隊編成が進められ、その間旅館に宿泊、私は小柄なので軍衣袴はブカブカでした。八日、宇品港まで行進ですが武器はなく徒手での行軍でした。

沿道の歓呼、旗の波に感激しながら、見送りの肉親

と並んで港まで、故国の土の踏み納めと軍歌を歌いながら行進しました。

九日、輸送船に乗り、宇品から瀬戸内海を関門海峡に向かったところ、霧が深く一時停泊、立ち往生。一晚中銅鑼や汽笛が鳴り響き、朝ようやく霧が晴れたので見渡せば、ちょうどゴマを振り撒いたように船がいっぱいなのにビックリしました。ようやく船が動きだして日本を船出、しばらく山陰の山々を右手に見ながら航行、やがて左に舵を取り日本海を北に進む。初めて見る海の広さ、波の大きさ、見渡すかぎり水、水、水、本当に地球が丸いと知りました。

朝、船員さんが「今日は荒れるよ」と言った通り大変な荒れよう。今日は三月十日の陸軍記念日で、尾頭つきに祝酒が出ましたが、船酔いでせっかくの御馳走も見ているだけ、横になるとゴロゴロ、縦になってもズーズーと滑ります。始末に閉口して小用で甲板に上がれば揺れて動けず、寝ながらイルカの群れが船と並んで泳ぐ姿を珍しく見えました。

十一日、朝鮮北端の羅津港に上陸、一本の木もない

荒涼たる山野の眺めに驚き、支給された水の張った弁当が齒にしみました。愛国婦人会の出迎えを受け、頂いた小さなリンゴの美味にビックリしました。夜中列車の窓を閉めて鮮満国境を通過しました。

十二日、零下十余度の満州牡丹江省寧安県愛河の満第五七三部隊戦車第五連隊着、第一中隊第一班に配属されました。

十三日、入隊式、田畑部隊長の訓示あり、直ちに遺髪、爪を切り遺書を書かされました。部隊はいまだにノモンハン事変の動員、下令中のため、いつでも出動できるとのことでした。

部隊はノモンハン帰りで軍規厳正、訓練精到で内務は殊のほか厳しく、ピンと張り切った中での軍隊生活は戸惑うことばかりで無我夢中、訓練に内務に汗と涙と泥の中での毎日でした。

初年兵の教育は歩兵が半分、戦車兵が半分で、小銃は騎兵銃ですが、私には一丁だけあった三八式歩兵銃が渡されました。体が小さい私が、長くて重い三八式を持たされたのも整列の最後尾にいるからでした。使

役も「ケツから0人」と指名され損をしました。

私は入隊に当たり一つの決意をしていました。「鶏口となるも牛後となるなかれ」をモットーにして、辛い仕事を率先してする、大きな声を出すこと、でした。四年兵から「石橋がほうきを持つのを見た事がないなあ」と言われた事があるように、私は掃除の時は必ず濡れ雑巾を持つようにしました。冬の水仕事は本当に辛いのですが我慢しました。

内務班は二、三年兵が約半分いて、ノモンハンの生き残りですから気合が入っていて、少しでもマゴマゴするとすぐビンタが飛んできました。班付下士官が班長の他に十人もいて、飯上げの時は何回も下士官室を往復せねばならず、腰を下ろしてゆっくり飯を食う暇がなく、ようやく食べられる時には残りの食事も少なくなっていて、空腹を抱えて演習整列に駆け出すことは常時でした。

ただ私は大声で下士官室に入入りするので、下士官の間では好評だったようです。また辛い戦友にも恵ま

れ、優しくしてもらい大変助かりました。渡辺昌幸上等兵は愛知県の西枇杷島町出身の人でした。

愛河の三月は零下十度以下になるので洗濯物はすぐ凍ってバリバリになってしまいます。ある時、私が洗濯しているのを見て、炊事場から湯をもらってきてくれ「石橋これで洗え」と言ってくれました。何かと親切にして頂き戦後もお付合をさせて頂き、私の孫の名前に昌幸を頂戴しました。

班長から酒保で饅頭を買ってくるように命ぜられ酒保に行ったら、古年兵が長い列を作っていました。初年兵が来る所ではないのです。困ったなあ下手すりゃビンタだと観念して大きな声で「石橋二等兵、班長の命令で饅頭を頂ぎに参りました」と怒鳴ったら、酒保の事務室の窓があいて「こっちに来い」と中に入れてくれました。「お前どこの出身だ?」「ハイ福岡の瀬高であります」「なに瀬高か、俺は隣の町だ」。これで酒保班長大坪軍曹殿と知り合いになり、二個しか売らない饅頭を十個もくれました。内務班長は短時間で十個も持って帰ったのでビックリしていました。

古兵のシゴキはけた外れて、例えば軍靴の手入れでも紐を通す鳩目の回りをつまようじで擦り、先に付いた黒いゴミを種にビンタをする。また小銃の床尾板と木部の境の隙間につまようじを入れて擦る、先についたゴミを初年兵の目の前に示して叩くなど、それは並外れのシゴキでした。

一期検閲までの五カ月間は歩戦両様の訓練でしたが、私が苦勞したのは全く経験のない自動車操縦でした。同年兵は割合い経験者が多かったのですが、素人の私は苦勞しました。私は寢床に入ってから操縦の手順を頭の中で考えながら、手足を動かす練習を每晚続けましたら昼間の訓練がスムーズにできたので助かりました。演習は架台（木製）で基本動作を練習しました。

私は旧制中学伝習館を卒業していたので、一期の検閲前の八月一日付けで幹部候補生を命ぜられ、胸に名札をつけました。連隊長の検閲が始まり私の前に来た時、随行の軍医が「これが連隊で一番小さな兵隊で

す」、連隊長「お前小さくても負けないか」、私は大声で「負けません」で無事検閲終わりです。

いよいよ幹候教育が始まり、三カ月の戦車隊下士官教育です。実際に戦車に乗っての訓練の始まりです。

九七式中戦車は日本軍の中核戦車で、重量十六トン、五七ミリ戦車砲、七・七ミリ重機二丁、時速四〇キロ、乗員は車長、砲手、操縦手、通信手の四人で、携帯武器は拳銃です。ソ連のBT戦車と比較すると速度六〇キロ対四〇キロ、砲の射程一キロ対六〇〇メートル、スピード六〇キロ対三八キロ、砲の貫通力が劣ると共に装甲の厚さが致命的でしたが、接近戦に持ち込めば勝算ありとのことでした。ソ連はキャタピラーが外れても車輪で走れるそうです。九七戦車は履帯が切れたらお手上げ。湿地帯で腹が擦ったら駄目、草の色が濃い所は湿地帯のシグナルでした。

戦車隊は外目には花形ですが実際は大変な苦勞でした。まず訓練後の手入れは四人で、エンジンの給油から手入れ、砲と機関銃の分解掃除、キャタピラーの掃除、点検、修理など、やることは山ほどありました。

翌日の演習に備えての冬季の暖気運転は夜通しの作業になり、夏季は車内の熱気に目がくらむばかりです。

歩兵と比較すると行軍の時は楽だが、あとは苦勞ばかり、夜就寝は最後になります。手袋は夏は鉄部が焼けるように熱く、冬は素手で触るとピタッと吸い付かれますので手袋は離せません。キャタピラーの一コマは小兵の私では持ち上げるのがやっとでした。

戦車の操縦は、車長の足による指図に従ってやるのですが、わずか一・五ミリ程ののぞき窓から見ただけなので進路を探るのが大変でした。

戦車隊は四両で一小隊編成、三小队十二両が一中隊ですが、段列といって補給隊がトラックで随伴します。食糧、弾薬、炊事、修理、衛生などを担当します。

日本の戦車は歩兵との協同作戦が主眼ですが、ソ連は機甲軍団の中の戦車ですから用法が違います。砲にしても日本は榴弾（敵の随伴歩兵が目標）ですから貫通力が弱い。ノモンハンンの戦訓は、参謀本部では生かされていないのが教育の端々に表われていました。世

界の動向に転換を迫られていた昭和十五年十一月一日、甲種幹部候補生を命ぜられ伍長になり、十二月十五日、公主嶺戦車学校に分遣されました。今度は、本格的な戦車隊下級将校教育が専門です。

学校の内務は学生だけの内務班でした。教官にはノモンハン生き残りの人もいましたが、あまり戦場体験、いわゆる戦訓を言わず、教育総監部製の教範に頼る事が多く、従来の歩戦協同の思想から抜け切れていませんでした。

メンツ優先の神がかりの天祐神助があるものかと痛感しました。教育中に「野砲の位置如何」との問題が出されましたが、戦車隊の下級将校には余り必要のない問題だなあと思いました。

戦車の正面装甲の厚みは二十五ミリですから、米ソの五十ミリには歯が立たないのが分かっていたいながら、終戦まで改良がなされなかったのは国力の差なのでしょう。

冬季のエンジン始動は前の夜から戦車の下で木炭を焚き、上に厚い覆いをかけておかなければならず、そ

のため一酸化炭素にやられる例が多かったです。

公主嶺の学校を昭和十六年七月二十九日卒業し、見習士官となり、昭和十六年十一月に少尉になり、戦車第五連隊付になりました。昭和十七年十月、連隊長に閑院宮春仁殿下が着任されました。皇族を長に頂き、光栄の極みと感動して、一層気を引き締めて軍務に励みました。

同十七年十一月に、千葉戦車学校に教育学生として分遣され、久しぶりに内地の土を踏みました。この学校では戦車の構造についての専門的な学習で、分解修理法が主でした。三カ月間の学習で愛河に帰って修理小隊長として旋盤溶接等の指導教育に当たりました。

九月に中尉となりましたが、戦局はガダルカナル転進、アッツ玉砕と悲報が続ぎ、南方行きが近づいてくるのを覚悟してました。

後聞するところによると、我が戦車第五連隊は優秀部隊としてサイパン防衛のため南方派遣が検討されましたが、宮様を前線に出すわけにはいかぬとのこと

で、代りに戦車第九連隊が動員されたが、昭和十九年七月サイパン玉砕になったそうです。

昭和十九年一月、陸軍兵器行政本部付となり、小倉陸軍造兵廠付となりました。八月十五日、廠長大幸中将から呼ばれ、大本営からの秘命令で所管の物資を速やかに県に払下げよとのこと。そして「命令伝達は、将校で運転できる者で、伝達後命令書は焼却せよ」との達しがありました。そこで深夜福岡県庁に赴き、当直職員ではらちが明かず、副知事に面会、この旨を伝えると、「どんな物がありますか」「世の中にあるものは、どんな物でもあるからトラックを用意して取りにきて下さい」。県は決っていましたでしたがそれでも取りに来ました。代金は取っていませんが、後で問題になると困るので領収証だけ取っておきました。トラック一台拾円だったと思います。

GHQに報告書を届けるので、駅に汽車の切符を買いに行ったら駅員が「今まで威張っていた軍人さんは切符は売らない」と言う。私は「売らないならそれで結構だ。歩いて行けないから売らない証明書を書いてくれよ、売らなくてよろしいから」「宛名は?」「GHQ宛だ」と言ったら青くなって早速売ってくれました。兵器は潰して鉄にし、他の物は全部県に渡ししました。

九月三日、陸軍大尉に任ぜられる。結局三月三十一日まで小倉で残務整理をして家に復員しましたが、白い飯は戦後初めて食べました。軍隊でも民間と同じ代用食でした。

家に帰ったら食物には不自由しないだろうと楽観していたら、わずかな農地も小作に出していたので全部取られ、預金は封鎖されて使えず、全く当てが外れ、仕事もなく途方に暮れました。家業の薬工品の方も思うにまかせず、加えて弟が第二総軍の通信で広島において原爆に遭い、背中にひどい火傷を負いました。そして収容所で寝ていて回りの人が次から次と死んで行く中を、母が白衣の弟を家に連れて帰り看病していました。体を横にすると背中肉がダランと下に垂れ下がる程の重傷でした。今は丈夫になりました。

復員する時、着ていた軍服を十年間着ていました。将校マントは毛布代りに使いました。

二万円借り、都築紡績の梱包材料や専売公社の塩吠を納入したり、物資不足の時代に公定価格で物資の斡旋をする仕事などで、十年後に自宅を建てました。物価の高騰等で晩飯がそうめん一把だったこともあり、激動の二十年を潜り抜け、ようやく安定した生活を得て、町会議員も経験し、誠実一路で現在に至っております。

南満逃避行

東京都 久保田 一 愛

私が高等小学校を卒業して、しばらく家の手伝いをしていた時、満鉄から全国的な規模で鉄道見習生の募集があり早速応募し、見事試験に合格した。正式名は満州工務員養成所である。はっきり記憶にないが、その時の合格者は数百人に達したと聞いている。当時両

親は健在で私は七人兄弟の長男だった。家業は自小作の農業である。

昭和十九（一九四四）年に徴兵検査を受け、同二十五年五月二十日、父の第九九八部隊に現地入隊した。工兵隊で、国境から南下の部隊である。四平街と梅河口の間の西安工務区で満鉄時代一緒に働いた同期の長岡が、同年兵として一緒に入隊したのは何よりも心強かった。

父に一月ぐらい滞在し、昭和二十年の六月、北満の東安の北の斐徳に満州第一三〇八〇部隊が編成され、遊撃隊として駐屯した。この第一三〇八〇部隊は全関東軍から選抜された精鋭で、若い兵が多かった。総勢、二千人を超す大部隊だった。

毎日の訓練は想像を絶するものがあつた。対戦車両薄攻撃、トーチカ攻略、塹壕戦とソ連を敵としての二十四時間の持久戦と、可能な限りの想像もつかない厳しさであつた。

八月七日、青天の霹靂、ソ連の参戦と南下が始まっ